

## 平成 27 年度第 3 回博物館構想策定委員会

- 1 日 時 平成 27 年 12 月 6 日（日） 10：00～12：00
- 2 場 所 おだわら市民交流センターUMECO 会議室 2
- 3 出席者 委 員：矢島委員長、相澤副委員長、井上委員、吉良委員、鳥居委員  
職 員：諸星文化部長、杉崎文化部副部長、安藤文化部副部長、大島文化財課長、古矢図書館長、諏訪間城址公園担当課長、佐々木主査、鳥居主事、鈴木主事  
望月行政情報係長、坂井主事、大木主査、堀田指導主事、大川主査、小林主査  
事務局：友部生涯学習課長、湯浅尊徳記念館担当副課長、岡郷土文化館係長、茂木主任、大貫主事、中村主事

### 4 概要

#### 教育長挨拶

諸星文化部長より挨拶があった。

#### 報告事項

基本構想策定のスケジュールについて

【矢島委員長】 これまでの協議内容について事務局と整理をさせていただいた。小田原の博物館全体をどうするのかという、非常に大きな話と、現在の郷土文化館の後継施設でもある博物館をどのような内容のものとするかという両方が、切り離せない話ではあるのだが、うまく整理がつかないまま議論が進んできたところがあったと思う。新しくつくられる博物館の問題と、既存のものを含めた小田原の博物館全体の話を切り分けて議論をした方がよいと思う。それを整理したものが資料 2、3 になってくると思うので、そこを中心に本日は議論をしていただきたい。また、市の種々の事情でスケジュールが遅れざるを得ないところがあり、それについて、まずは事務局からご説明願いたい。

【友部生涯学習課長】 それでは博物館基本構想策定のスケジュールについてご説明する。

資料 1 をご覧いただきたい。

当初、博物館基本構想の策定スケジュールについては、今年度の 3 月に答申いただく予定でスケジュールを組んでいたが、会議の進捗状況等を勘案すると、ただいま、矢島委員長からもお話しがあったように、当初想定していた作業より内容にボリュームが出た感がある。

こうしたことから、皆様の任期いっぱいのある 7 月まで答申までの期間を延長させていただき、策定作業を継続させていただくよう変更するものである。

具体的には、本日の会議で構想の基本的な考え方と構成についてご協議いただき、それを受けて、事務局で文章化に着手したいと考えている。その後、来年1月下旬から2月に草案の前半部分、4月頃に後半部分をそれぞれご協議いただき、6月頃に全体を通して皆様にご確認いただいた後、正副委員長の最終確認をいただいて完了とし、7月にご提出をいただきたいと考えている。

なお、先ほど部長からも申し上げたように、芸術文化創造センターの整備が遅れる見通しとなり、他の公共施設の整備も影響を受けるため、郷土文化館の発展形である新しい博物館の整備も当初の想定より遅れることを想定している。それまでの間は、策定された基本構想をもとに、郷土文化館の機能の充実や既存施設間の連携体制の構築、資料の整理や調査等、新しい博物館の整備に向けた取り組みを推進してまいりたいと考えている。ご説明は以上である。

【矢島委員長】 ただいまの報告についてご意見等あるか。ないようなので、次に移る。

## 協議事項

博物館構想の基本的な考え方について

【矢島委員長】 それでは「博物館構想の基本的な考え方について」事務局よりご説明願いたい。

【友部生涯学習課長】 お手元の資料2と3を併せてご覧いただきたい。

資料2は基本構想の考え方についての案である。前回文章案をお示ししたが、委員の皆様から、基本的な考え方を重点的に協議すべきであるというご意見をいただいたため、これまでの協議を踏まえて事務局で再整理を行ったものである。資料3はその考え方を章立ての形にしたものである。

資料2のゴシック体で表記している箇所の横の数字については、資料3の章立て案のどこに対応するかということを表している。資料2でお示した内容が、構想の文案作成の際、具体的に書かれるようにしてまいりたい。

全体の構成については、基本構想は小田原市の博物館関係の活動を包括するものとして、大きな概念として目指す姿を設定した。

その目指す姿を実現するための柱として、小田原全体を博物館としてとらえるいわゆるフィールドミュージアムと、施設として整備する新しい博物館の2本を立てた。

フィールドミュージアムは、新しい博物館が整備され、既存施設等の様々な主体と連携する中で見えてくるものにとらえているが、どちらが上位

ということではなく、この 2 つをもって小田原市の博物館活動をより良いものにしていこう、という考え方である。

それでは個別にご説明する。

まず、基本構想の基本的な考え方について、3 つの視点で整理した。

「小田原・足柄平野の歴史をたどる」では、小田原という地域をより理解していくために、博物館で扱う主な範囲を、小田原を中心とした足柄地域ととらえた。主な範囲と申し上げたのは、博物館活動が扱うテーマによっては当然、他県などに関わることが想定されるため、この点については触れておきたいと考えている。

「小田原の宝を未来に伝える」では、小田原市の歴史や文化の変遷を示す資料や、それらに関係する情報を集め、将来にわたって活用できるよう、保存していくことが必要であるということである。

「市民とつくる博物館」は、博物館は市民のものとして、その活動については行政だけでなく、市民とともに作りあげていく、市民参画、協働の概念を盛り込んだものである。

以上のことを踏まえ、本市の博物館活動として目指す姿を「小田原の歴史を未来に伝え市民とつくる博物館」と表現した。

この姿を実現するためには、まちなかの様々な地域資源がその場に残され、その意味について市民がそれぞれの場所で学び、その学びを外に発信していく、フィールドミュージアムの実現と、博物館資料を集め、情報を集約し、皆様からもご指摘いただいたように、そこに行けば小田原のことが理解できるような施設としての新しい博物館整備という 2 つが必要であると考えることから、こちらにフィールドミュージアムと新しい博物館の 2 つの柱を示している。

はじめに、フィールドミュージアムの方向性を項目立てしているので、順にご説明する。

まず、既存の施設や各種団体等との連携を深め、ネットワークづくりを図ってまいりたい。

そうしたネットワークや施設での調査研究活動を基礎として、地域資源をより具体的に見える化し、再評価していきたいと考えている。

次に、ネットワークの整備や地域資源の再評価により、市民が地域資源に触れるきっかけをつくり、そこから小田原という地域について独自に学びを深め、再発見していけるようにしてまいりたいと考えている。また、こうして学びを深めた市民が自ら情報を発信する側となり、これから学ぶ方のための力にもなることを盛り込みたいと考えている。

最後に文化観光の推進であるが、これは文化観光という概念について委

員からご提案もいただいたので、先ほどご説明した、市民が小田原の魅力を再発見するための仕組みについて、外部から来られた方が小田原を知るための仕掛けとしても機能するものとして整理したものである。

こちらの方向性については、既存施設の役割を見直し、互いに連携して活動を展開することや、市民団体などを巻き込んでいくことで具体化していくことと考えており、新しい博物館の整備はフィールドミュージアムの実現を後押しするものでもあると考えている。

本市としては、施設の外のさまざまな活動や地域資源、また既存施設を含む様々なハードとソフトのネットワーク化により、全体として地域づくり、まちづくりにも通ずる、これまでにない博物館の概念をつくりあげていきたいと考えている。あわせて、現在の郷土文化館がその活動をより強化していくことで、今後整備される新しい博物館に発展的に継承され、施設としてもこれまでより質の高いものが整備されることで、フィールドミュージアムの実現を推進してまいりたいと考えている。

次に新しい博物館の方向性についてご説明する。

「歴史・考古・民俗を主体とした歴史総合博物館」は、これまでご協議いただいた中で、人文系とするよりも美術資料なども取り入れて展示に幅を持たせていくというご意見があったため、歴史総合博物館としている。具体的には本市を中心として、小田原・足柄平野の歴史や文化を分かりやすく紹介する場としていきたいと考えている。また、登録博物館を目指すとともに、本市の既存施設には公開承認施設がないが、本市の歴史や文化を紹介する上で、国宝や重要文化財などを扱う必要性もあることから、公開承認施設を目指すことを盛り込んでまいりたい。

「すべての人に開かれた博物館」については、博物館という場は誰にとっても利用しやすいものであるべきというご意見を受け、また、より多くの人々に積極的に活用される施設であってほしいことからこのような表現としている。

まず、ユニバーサルデザインの考えを取り入れていきたいと考えている。アクセスについては施設・設備と活動の両面で考えている。

子ども同士でも利用しやすい環境というのは、誰にとっても、という中に含まれるものであるが、皆様から学校教育との連携について重視すべきというご意見をいただいた中で、学校との関係だけでなく子どもだけでも容易に来られるようにというご意見もいただいたことから、特に重視してまいりたいと考えている。

先に挙げた 3 つの内容が施設面での使いやすさととらえられ易いことから、使いやすさはソフト面も含めての概念であることを、強調したいため、

各種事業への参加しやすさを盛り込んでいきたいと考えている。  
資料の情報を誰もが使いやすいようにする、ということについては、情報の利用に障がいの有無などの事情で制約が生じることは望ましくないことを表現してまいりたい。

「市民とともに成長する博物館」については、博物館活動の基本的な考えを受けてのことであり、かつ、委員の皆様からの小田原方式として、資料の面だけでなく、市民と行政がともに活動するあり方として独自性を出せないかというご意見を受けてのものである。

まずは、館独自の調査研究が博物館活動の基礎となることから、その充実について触れてまいりたい。

そのうえで、博物館活動の様々な分野にわたり、市民と協働した調査・研究・展示を行っていくことを盛り込んでいる。

また、博物館の調査だけでなく、市民の調査研究結果をほかの市民が活用できるように、市民の研究結果を蓄積することを盛り込んでいる。

あわせて、市民と行政がともに作りあげる博物館であるので、市民の意見を取り入れよりよい活動を目指す必要があることから、市民の声を活動に反映させることを入れている。

次の「学校教育と連携した博物館」については、委員の皆様から学校教育との連携についてご意見をいただいたことから、柱立てしたものである。内容としては、学校で必要とされている事柄について博物館が主体的に掘り起こしていき、体験メニューなどの事業を充実させるとともに、来館を待つ受け身の姿勢ではなく、学校教育の現場等に積極的に出て行って活動していくということに触れてまいりたい。

次に、災害に強い博物館については、皆様から小田原という地域の特性上、地震や津波、塩害などへ十分な配慮をすべきであるというご意見をいただいたことから、施設利用者と収蔵する資料の安全、安心を確保していくという内容を盛り込んでまいりたいと考えている。

次に情報集約型の博物館については、本市では資料整理の遅れや、既存施設間で情報の共有化が図られていないなどの課題があることや、博物館に来れば利用者が資料に関する情報をすべてわかるようにする状態が望ましいというご意見を受け、柱立てしたものである。

情報の一元管理については、収蔵資料と地域資源の調査を進め情報の一元管理を図って利用者の利便性を高めるとともに、既存施設での調査研究活動を充実させることについて触れてまいりたい。

また、資料のデジタル化の推進により、利用者の利便性をより高めるとともに、情報通信技術などを活用し、整理した情報を積極的に発信していき

たいと考えている。

以上が基本構想の基本的な考え方になるが、こちらを章立てにしたものが資料3である。

第1章については、皆様からのご意見を受け、郷土文化館の発展的移行が課題となっていることがより見えるように、前回お示しした文案では最後に書いていたが、こちらを第1節として柱立てして最初に据え、前回の文案では最初に挙げていた、既存施設の役割等の課題は第2節を設けて整理したいと考えている。第3節は、施設の中にモノとして収めることのできない史跡やなりわい等の地域資源の保存・活用が課題となっていることについて、博物館活動のうち施設の外で行っている活動をより見える形にしていきたいことも含めて強調したいことから、1節を設けて整理したいと考えている。

第2章から第4章まではほぼ資料2の構成と同じである。

第5章以降は新しい博物館の内容となる。文言としては一般的になっているが、基本的なものとして押さえるべきところがあることから、構成はこのような形にさせていただき、その中で重要な要素は、例えば教育・普及のところでは学校教育との連携を強調するなど、第4章で取り上げた方向性を受けて強く打ち出してまいりたいと考えている。

本日いただいたご意見を基に章立ては修正をさせていただき、文章化して次回皆様にお示ししたい。本日は、資料2を用いてご説明した基本的な考え方について、方向性や目指すべき視点等のご意見をいただきたい。ご説明は以上である。

- 【矢島委員長】 これまでも繰り返し議論されてきたことであるが、郷土文化館の後継としてつくられる新しい博物館の問題に先立って既存の施設にどのような整理をして考えていくのかというところで、フィールドミュージアムがここで提示されている。まずこの点についてご意見をいただきたい。
- 【井上委員】 今まで協議されてきた、松永記念館等の既存施設の連携ということの中で、市民団体との連携も触れられると思うが、今日の会場である、おだわら市民交流センターが市民団体の活動の場として機能し始めていると思う。とすれば、市民団体との連携という面で、市民交流センター自体が博物館と密接な関係が不可欠ということになるのではないかと思う。今までの議論の中では、そうした関係は視点に入っていなかった。市の方では、市民交流センターと博物館がどのような位置づけになると考えているか。今まで視野に入っていなかったもので、お伺いしたい。
- 【諸星文化部長】 この市民交流センターは多様な市民活動の拠点という位置づけがある。これまで様々なジャンルの市民活動の拠点は市民会館の中にある、市民活動

サポートセンターが担っていたが、それを引き継ぐ形になっている。もうひとつは女性行政の部分での施設があり、それを市民交流センターに取り込んでいくという要素もある。もうひとつは国際交流であるとか、在住外国人の支援をする国際交流ラウンジという施設が栄町の駐車場の中に併設されていたが、こちらの活動も取り込んだものである。市民活動としてジャンル分けされていたものを一カ所に集約し、さらに市民活動を推進するための拠点としていくということである。博物館構想と市民交流センターの関係であるが、ハード的には連携を取っていくかは微妙なところがあると思う。ただ、市民活動のうち、例えばガイド協会や小田原史談会、そのほかにも、現在行われているキャンパスおだわらという生涯学習の仕組みの以前にあったシルバー大学での歴史観光学科という中で学ばれた方が、サークルをつくり継続して活動されている方もいらっしゃるので、そういった具体的な市民の活動、団体さんとの連携、交流を博物館構想の中では意識していくということであると思う。交流センターの愛称はUMECOとなり、これ自体が市民に親しまれたインド象の名前を使っていたりと、愛称そのものにも地域資源としての要素がないわけではないが、ハードそのものの、まるごとの連携ということではなく、この中ではぐくまれている活動とどう連携をしていくかが、市が意識しているところである。

- 【井上委員】 例えば、ほかの博物館を訪れた時に、交流センター的な市民団体の活動の場がないところでは、博物館自体がハード面として活動スペースを設置していることがある。そうすると、ここがある以上はつくるべき新しい博物館の中には、ハード的な面は考えなくてもよいのかな、と個人的には思うのだが。そこはそういう理解でよろしいか。
- 【諸星文化部長】 まったく考慮しなくてよいかはこれからの議論によると思うが、せっかくこうした場があるので、市民活動の拠点という意味では井上委員のご意見がふさわしいのではないかと思う。
- 【矢島委員長】 中身にもよると思う。博物館で市民による調査・研究を充実させていくとなると、具体的にモノがないとできない議論があると思う。そうすると、市民交流センターだけでハード的なものが済むかということ、ある程度のことは博物館でも考えざるを得ないのではないか。
- 【鳥居委員】 この資料に即して質問をさせていただきたい。小田原市博物館基本構想に基づく博物館において、小田原フィールドミュージアムと新しい博物館はどのような関係になるか。並列か、概念としてどちらが上などがあるか。
- 【友部生涯学習課長】 上下関係はないと考えている。小田原全体を博物館として見せていきたいという思いがあり、その中で別にハードとして機能していく博物館がある。これは今までは中核館や中心と表現していたものである。整備する博物館

にはフィールドミュージアムの実現の中でこういった機能を持たせていくかということになるので、そういった意味では、どちらが先、どちらが上ということはないと思う。

新しい博物館ができるまでフィールドミュージアムができないのかということになると、整備までそうした動きができないこととなる。中心となる博物館ができないまでも、フィールドミュージアムに向かって進められることはあるので、構想の中によりどころをつくっていただいて、そこに向けて動いていきたいと考えている。

【鳥居委員】 並列とみてよろしいのか。博物館は概念ではなく、当然資料を集めて保存する場も必要であり、ふたつの要素の博物館が並列で準備を行うということは、ふたつの館をつくるというイメージに見えるが、そう解釈してよいのか。

【友部生涯学習課長】 館としては新しい博物館がハードとして整備される。ただ、概念としてはフィールドミュージアムという言葉にしているが、小田原全体の様々な地域資源を地域地域で活用していくというようなイメージを持っている。

【鳥居委員】 そういう考え方では並列ではないのではないのか。博物館とはハードとソフトが連携を取って活動する組織である。プランを練るとか、こうした考え方で活動するというのであれば、それは博物館とは言わないと思う。この資料を見ると、小田原フィールドミュージアムの方向性がいずれも理念的なものばかりである。新しい博物館の方は基本構想にふさわしい方向性が見える展開例が書いてある。上に書かれているフィールドミュージアムは理念だけであるから、下の新しい博物館にも当てはまる考え方である。この資料を見ると、フィールドミュージアムには展開例が書いていないから、どういう活動をするのか、どういう考え方が見えてこない。この資料を見る限りでは、並列に存在させるのは難しいと思う。並列に存在させるなら、もう少し、どういう活動をするのか見えてくるような資料を提示して頂かないと、考え方が理解できないと思う。

【吉良委員】 資料2を見る限り、大枠の基本的なコンセプトが出ていて、小田原フィールドミュージアム構想の中に新しい博物館をつくる構造だと読める。

【鳥居委員】 そう見えるので質問したが、フィールドミュージアムが上位ということではないという回答だった。

【吉良委員】 上位ではなくすべて含めて新しい博物館とお考えなのか。

【友部生涯学習課長】 上位ではなく、前提と考えている。

【吉良委員】 全体の中でどのように位置づけていくのかという構造を示されたのだと認識したのだが。

【鳥居委員】 資料のつくりをみるとそう見えるが、どちらが上でもどちらが下でもない



ということであった。これは資料の作り方だけの問題ではないと思う。やはりわかりにくさがあると思う。どうしてフィールドミュージアムを2本柱のひとつにしたのかが見えにくい。

- 【友部生涯学習課長】 小田原市の場合は、市民の力で進めていくという中で、博物館という切り口でも、そこでは当然市民の力、地域の資源、宝を使っていこうという考え方がある。小田原市は様々な地域資源に恵まれている立地条件であるので、そういうものを地域地域で活用していこうという考え方を総合してフィールドミュージアムという考え方をしている。
- 【鳥居委員】 総合しているというよりも、視点として重要視しているということではないのか。
- 【矢島委員長】 新しい博物館をきちんと整備しよう、郷土文化館を拡充発展させようというところから始まり、最初のころに既存施設ではどのような資料をもってそれをどうするのかという議論をしたが、そこから見えてきたのは、結局それぞれがバラバラに活動していたのではないかということではないか。せっきくの活動や資源を上手につなげることができたら、もっといいものができるであろうということも、おそらく皆さん見えてこられたと思う。さらにそこに、具体的に博物館の中に入ってきていない、そうした意味ではきちんと資源化されていないものを資源化することも視野に入れて、それが仮に博物館という名前になっているが、それにはこだわらずに、小田原としてそういった、持てるものをどのように活用しようかという、システムとまではいかないが、考え方としてフィールドミュージアムとして大きく出したいということであろうと思う。そういう意味ではこれは並列というのも変であるし、前提としてその中に小さく博物館をつくってしまうのもどうかと思うが、ひとつの大きな考え方の中で全体を進めようという、言ってみればマニフェストのようなものであろうと思う。鳥居委員が言われるように、フィールドミュージアムとして何を考えているのかということとは「連携を推進する」や「再評価をする」「再発見をする」ということが出ているが、これの基礎になる考えが見えないと言われているのだと思う。
- 【井上委員】 私の理解ではフィールドミュージアムという言葉自体がわかりにくい。これが一般化された言葉かということにはちょっとわからないのだが、フィールドミュージアムという言葉にするから2本立てのように見えるが、小田原の文化をどう市民が活用して、また、文化を外に発信していくかという、小田原の文化のあり方というか、理念的なことがここで示されていて、その中核的なものとして博物館があるのだということなので、章立てとして3と4のふたつでやってしまうと誤解があるので、フィールドミュー

ジウムという言葉を整理しないといけないのではないかと思う。私はこれは文化のあり方、文化と市民の関わり方であると思うので、そういった理念的なものの説明の中で、この博物館が 中核的な役割を果たすというような理解をしていたので、並列であるとか、そういうことではなくて、言っていることの次元が違うのではないかと思う。

【相澤副委員長】 エコミュージウムという言葉が一般的ではないかと思う。エコミュージウムの場合、小田原の環境そのものをミュージウムととらえることになる。今、井上委員が言われたようにその中の中核としての博物館というような位置づけになるのではないかと思っていたところである。目指す姿のところで新しい博物館の整備が出てくるのも少しおかしいかなと感じるところもあるので、小田原フィールドミュージウムの中核としての新しい博物館ということではないかと思う。フィールドミュージウムというのは、環境全部というよりも、フィールドミュージウムを目指す新しい博物館という単一のことなのか。

【友部生涯学習課長】 先ほど委員長も言われた通り、小田原フィールドミュージウムは理念的なものである。小田原には様々な地域資源があるので、小田原フィールドミュージウムという言葉で表現し、打ち出していこうということである。そのため、システムとしてどのようなことになるということは、この段階では特段書いていない。

【相澤副委員長】 全体の動きの中で、新しい博物館をとらえていこうということであると思う。新しい博物館もフィールドミュージウムを目指す、既存施設もフィールドミュージウムを目指すというようなイメージか。

【諸星文化部長】 委員長が言われた通り、これまでお見せしていた資料から変わってきているのは、小田原市の財政状況を踏まえたネガティブなところから出ているところもあるのだが、一方で豊かな地域資源をもっと活かしていこうということで、この方向性を打ち出したものである。これまでの議論で委員の皆様からいくつかご指摘いただいた点で、市民がもっと学習をする、学校との連携などがあつたが、そうした視点を取り入れてまとめてきている。委員長が言われた通り、既存の施設がいくつかあるが、それらがある意味で個別に活動していて、悪い言い方をすれば、バラバラに進んでしまっているところを、フィールドミュージウムという考え方の中で、小田原市の博物館活動全体をひとつの理念の中にとりこんで方向性を定め、その考え方の中で、それぞれが整備されたり運営されたりする姿を目指すということであり、ひとつには連携などのあり方があると思う。ただ、天守閣などは耐震のリニューアルがあり先んじて進んでいくが、そうしたものも合わせて、網をかけて進めていくということと、個別の史跡やその他の地

域資源など、ハコの中に取り込めない要素のものもその考え方に基づいて、整備をしたり管理をしたり、運営をしたり、行政の活動以外のものも含まれてくるので、その意味でも市民とともにつくっていくという方向性も、フィールドミュージアムという言葉で網掛けをした方向性の中で進めていくところである。そうした意味では、前提、あるいは上位概念、理念として掲げているのがフィールドミュージアムという言葉で表されているということになると思う。言い方などは我々ももう少し整理が必要であると考えますが、委員の皆様が言われることと我々が考えていることが違っているとは思わない。さらに言えば、郷土文化館が直ちにリニューアルできないので、今後のあり方としてはこの考え方に基づいて、システムや運営のやり方などの見直しでもっとやれることはあるはずというご指摘もあるので、そうしたものも意識している。

【鳥居委員】 類似の博物館施設と連携を取ることが必ずしもフィールドミュージアムと同じ意味ではないと思う。また、市民参画がフィールドミュージアムになるということでもないと思う。今までの皆さんのお話を聞くと、新しい博物館を建設するときの視点のひとつというところが一番落ち着くのではないか。この資料の作り方として、概念としてはフィールドミュージアムが上で、その中に新しい博物館が入るというつくりになっている。この基本構想で検討している新しい博物館の目指す姿が新しい博物館の整備というのはおかしい。新しい博物館で検討している方向性のひとつではないのか。2つの項目立てをして並列にするというお話だったが、どうもそれではなかなか、この資料自体もそうならないし、実際に納まりが悪いのではないかと思う。

【井上委員】 この資料 2 がそのまま章立てに移行するのだと思うが、目指す姿のところで①②のふたつがあるからわかりづらいのだと思う。書きぶりにもよると思うが、ここは検討する必要があるのではないか。

【吉良委員】 今言われているのは構造の問題であると思う。フィールドミュージアムの実現には、既存施設間の連携をどうするか、どう住み分けをするかという、大きな課題がある。それは職員のことも含めて、非常に大きな課題であって、さまざまなことが起こるだろうと思い、そのことに取り組むのだな、と思った。新しい博物館をどう考えるかという構想を練る委員会だと思っていたが、大きな課題と、具体的な博物館という両者の関係性が明確にされないまま併記してしまうと、①の方もこの委員会でやるのか、ということになる。②を想定していたところに、①という枠組みの中で考える、ということになると、私たちはそこまで考えていたのか不安である。少し覚悟のしかたが違うような気はする。

【安藤文化部副部長】 フィールドミュージアムという言い方をしているが、俗っぽい言い方をすれば、まちじゅう博物館にしようということである。様々な地域資源が眠っている中で、そこになかなか焦点が当たっていないとか、磨かれていないということの中にも焦点を当てて、再評価をしてそこも見てくださいということである。そうした、まちじゅう博物館を目指していこうということと、もうひとつ郷土文化館に替わる新しい博物館をつくっていこうということがあり、そういう意味で並列であるが、概念としてフィールドミュージアムが新しい博物館を包含しているという言い方もできている。フィールドミュージアムについてはひとつひとつ仕組みを考えていくと膨大な作業が必要になるが、この委員会でそこを追求していくのは難しいと思う。構想では概念的、理念的なところまで整理していただければよいと考えている。もうひとつの新しい博物館の方は具体的に詰めていただきたい。フィールドミュージアムが全体の概念であり、新しい博物館を包含しているという言い方はできると思う。

【鳥居委員】 そういう考え方で小田原市は統一されているのか。もし上位概念であったら、深く検討しないということでのよいのか。

【安藤文化部副部長】 まちじゅう博物館という前提を置きたいということである。

【鳥居委員】 この資料を基に我々は検討するわけである。やはり資料というものはそのまま見れば上に書いてあるものが上位概念であり、重要視するというを示すものである。先ほど吉良委員が読まれたように、あくまでも新しい博物館はフィールドミュージアムの一部であるという、そういう資料になっている。

【安藤文化部副部長】 上位というのとはまた少し違う。博物館活動の中で、目指していくところが2つあるということである。

【鳥居委員】 では、先ほどの話では、新しい博物館だけを検討すればよいのではないか。考え方のひとつということでのよいのではないか。単に、新しい博物館はフィールドミュージアムとしての視点を持って活動しますということでのよいのではないか。新しい博物館の方向性のひとつではないのか。

【安藤文化部副部長】 言われることがわかる部分もあるのだが、新しい博物館ができて、そこがフィールドミュージアムをつくっていくというのも少し違うと思う。我々も整理は悩んだところである。新しい博物館をつくるというところから、まちなかの資源にも光を当てていきたいということも市の考えとして出てきたところがある。それをどう取り込んでいくかという中でこのような整理をさせていただいた。

【鳥居委員】 そこを苦勞されたというのはこの資料 3 からも見えてくるのだが、私たちはこの資料に即して検討していかなければならない。小田原フィールド

ミュージアムのありかたとして(1)から(4)までが上がっている。新しい博物館のありかたとして(1)から(6)までが上がっている。これは同列である。しかし、資料2を見ると、新しい博物館の方向性のゴシックになっている項目が6あがっている。フィールドミュージアムは理念的なもので方向性ではないから四角形の印がついている。資料2と資料3でレベルが違っているものが同列に示されている。やはりもう少し考え方が整理されないと、おっしゃることが理解しにくいと思う。フィールドミュージアムをやりたいのであれば、そのような方向性が見える資料であればこの議論も進んでいくのではないかと思うが。

**【友部生涯学習課長】** 資料3の章立てについては精査して修正していくが、資料2の考え方からすると、繰り返しになるがフィールドミュージアムというのは理念的な考え方になるので、基本構想の段階では漠としたものになってしまうと思う。ただ、新しい博物館についてはある程度基本的な機能についてイメージできるところまで書き込む必要があると考えている。そのため、おのずと書き方のレベルが変わってきてしまうとは思う。向いているベクトルがふたつあるということでご理解いただければと思う。フィールドミュージアムについては、この言葉が先にありきというよりも、4つの星のようなかたちで書いていることをしていくと、小田原全体がフィールドミュージアムと呼ぶようなものになるというイメージでとらえていただければと思う。ご説明が難しいのだが。

**【矢島委員長】** 資料3で言うとボリュームが大きいので3という形で独立しているが、実質的には2(2)①で、ここに中身が入れば3がなくてもよいのではないかと思う。レベルの違いを問題にするのであれば2(2)①に入れるという方向性で整理をして、新しい博物館の整備の方向性は4を繰り上げていきなり書いてしまっても問題はないのではないか。委員長として整理してまとめさせていただくと、フィールドミュージアムという言葉そのものを使うかは置いておくと、小田原全体を博物館という視点でとらえて、既存の施設あるいは地域資源を活かしていく。それに加えて、その中に新しい博物館も位置づけようという宣言であると受け止めれば、これの具体的な中身をここで議論して構想に書くことはないのではないか。非常に大きな意味での位置付けというか、考え方を表明するということであり、これが独立するというよりは、前文というような性質になるのではないかと思う。基本的な考え方と目指す姿の中にこれが入ってくれば、整理ができるのではないかと思うのだが。

**【鳥居委員】** そうなると、2(1)の基本的な考え方の方に移した方がよいのではないか。

**【矢島委員長】** 私もそのように思う。

- 【井上委員】 3と4という大きな章立てにしているから誤解が生じるので、今委員長が言われたように基本的な考え方の中にフィールドミュージアム的な考え方を入れて、ただ、それを抜かしてしまうと新しい博物館の位置づけがわからなくなるので、やはり大きな中でやるのであれば2に入れていただいた方がよい。これは「小田原市博物館基本構想」である。つまりあくまでも新しい中核となる博物館の構想であり、それを強く出すには3を章立てしてしまうと両立・並立という形で誤解が生じてしまうと思う。章立てが違和感があるので、委員長の言われたように2のところで、さらりとってはおかしいのだが、中で言った方がおさまりはよいと思う。
- 【相澤副委員長】 私もそのように思う。資料の2と3がちょっと連動していないところがある。2では基本的な考え方と目指す姿がふたつに分かれているが、3では目指す姿だけがあり、フィールドミュージアムが独立しているように見えるので、そのようになってくると思う。今、皆さんがおっしゃられたように資料3の2のところに3を入れてしまってはどうか。資料2の目指す姿というのは資料3では新しい博物館に関しての目指す姿は取ってしまえば、というのも、章立てを変えると、新しい博物館の方向性がそのままつながる形になるので、そうするとわかりやすくなるのではないかと思うが。
- 【友部生涯学習課長】 事務局としてはフィールドミュージアムということを前面に出したいという思いがあったので、いったんこういう形でつくらせていただいた。いろいろご意見をいただいて、確かにフィールドミュージアムという概念は外せないが、それは別のやり方できちんと、小田原市としての考え方の前提というか全体を考える中で、フィールドミュージアムというものがあって、その中で新しい博物館をどう具体的に考えるかということを書き込む形で、要素としてはここにある要素を書き込むことになると思うが、見せ方をもう少し考えたい。
- 【矢島委員長】 用語としては、フィールドミュージアムという言葉はどう使うか。
- 【井上委員】 他の事例などで、一般的に使われているか。
- 【矢島委員長】 使われていないとまでは言わないが、明確な意味で使われているのではないか。
- 【鳥居委員】 一時はやりかけたが、やはりうまくいかなかったり、まとめ方が難しかったりで、今はほとんど使っていないのではないか。
- 【矢島委員長】 フィールドという言葉が出てきた時に、それを考えた中身がばらばらであった。
- 【井上委員】 市民がわかりにくいのではないかと思う。私は安藤副部長が言われたような「まちじゅう博物館」がすっきりすると思う。イコールかということ意味

は少し違うのかもしれないと思うが。市民にアピールするときにわかりやすい、誰もがそうなんだと思える言葉の方がよい。今日、資料として配られたまちかど博物館のパンフレットを見ても、これだけの数がある。そうしたものを視野に入れながら、すっきりと誰でもわかる言葉の方がよいと思う。

【友部生涯学習課長】用語については再検討していきたい。

【諸星文化部長】用語については、登場したときのヨーロッパの定義に小田原が収まるのかということも含め、この用語を使うのが適切かということもあると思う。最近是全国的な地方創生の動きの中でこの言葉が使われているということもあり、それはどちらかという博物館活動というとらえ方以上に、まちづくりというか、まちおこしとして登場していることがあるので、地域によってかなり定義づけが違う。同じ言葉を使っているが、目指している姿が一致しているかという、そうでもない。その意味では使い方に注意のいる言葉かもしれない。すでにある言葉なのでそれを使わせていただいたが、小田原として目指すところは、まちじゅう博物館というか、まちなかにある定義としては博物館に含まれないものや史跡等も含めて、活用していくというところが一番のポイントであると思う。また、委員長に資料の整理をしていただいた形で、我々が未整理な部分があったが、その一方で構想の使い方として、博物館整備の着手にはまだ時間がかかる。その中で、構想の使い方として、既存の施設の活用の仕方や地域資源の活用の仕方に、構想に基づいて変えていきたいと考えている。先ほどの構想の中にフィールドミュージアムを出してきたのはそのような意図があつてのことである。そのため、どこかには書き込まれていて、その構想に基づいて既存施設の位置づけであるとか、活用の仕方は見直していきたい。特に郷土文化館が直ちにハード的なリニューアルがかなわないため、そのありようについて、構想に基づいて、今できることには結び付けていきたい。我々が構想に求めるところはそうしたところもあるので、お含みいただければありがたい。

【吉良委員】「まちじゅう博物館」は言葉としてはよいのだが、新しい博物館が歴史・考古・民俗・美術を含めてということになると、「まち」という言葉が「街」なのかということも含め、町場のことだけではないのでふさわしくないのではないかと。フィールドは広いわけで、一夜城なども含めるとどうなのだろう。広い言い方があればよいが。

【友部生涯学習課長】他市町村の事例などを見ると、ひらがなで「まちじゅう」を使っている。

【矢島委員長】あるいは「まるごと」という言い方がある。

【相澤副委員長】茅ヶ崎市は「まるごと」を使っている。

- 【矢島委員長】 町場だけでなく、フィールド、自然環境を含んで「まるごと」ということになる。
- さて、これまでの議論で修正の要点は見えてきたのではないかと思う。言葉は別にしてフィールドミュージアムについては基本的な考え方に位置付ける。もうひとつ、新しい博物館の中身を具体的にどうするかということについては、これまでの議論を基にして、改めて整理したものをここで提示して議論したいと思う。資料 2 にある新しい博物館の具体的な項目について、ご意見あるか。
- 【吉良委員】 ユニバーサルデザインといったカタカナ用語は何をするのか明確に書かれた方がよい。どのようなことを想定しているか。
- 【友部生涯学習課長】 例えば、障がい者に特化したデザインということではなく、そうしたことを意識する以前に、年齢や性別なども含めて、そういったことによらず、誰でも使いやすいデザインということを考えている。おっしゃるようにカタカナはわかりづらいということもあり、また、これから建設される施設でユニバーサルデザインを無視したものはありえないと思うので、そうしたことを意識している。
- 【鳥居委員】 ユニバーサルデザインは障がいの有無だけでなく、言語の問題もある。一昔前では障がい者への対応や多言語化などで言われていたことをひとくくりにした言葉である。ユニバーサルデザインはすべてのバリアを除くという意味で、理解している方はわかるのだが、一般化した用語かということには慎重になる必要があるかもしれない。すべての障がいを取り除くということをうまい言葉で表現されればよいと思う。
- 【友部生涯学習課長】 かつてはバリアフリーという言葉を使っていたが、その次の段階と認識している。
- 【鳥居委員】 「歴史・考古・民俗を主体とした歴史総合博物館」のところに「国宝・重要文化財が展示可能な公開承認施設を目指します。」とあるがこれは施設の話であるので、新しい博物館の展開例としてここに入れるのは違和感がある。全体的な章立てを見ると、「新しい博物館の施設・立地」というところがある。公開承認施設かどうかというのは、設備の問題である。恒温恒湿であるか、防犯、防災などの必要な条件を満たしているかを消防署に検査してもらって、文化庁から承認を得るものであって、こういうところに入れるのはそぐわない気がする。もっと歴史総合博物館として目指す展開例を書いた方がよい。同じような理由で、次の「すべての人に開かれた博物館」に「アクセスしやすい施設にします」とここでもカタカナが出てきているが、一般的にアクセスというと交通の利便性などになると思う。「すべての人に開かれた博物館」で交通の利便性がよいというのは重要な要素かもしれないが、これも「新しい博物館の施設・立地」で押さえては



どうか。ここで言いたいのは、例えば必要な情報がすぐに得ることができるとか、求めることにすぐに対応できるということであれば、そういった言葉に変えたほうがよいのではないか。

【友部生涯学習課長】 おっしゃられるようにアクセスという言葉は、駅から何分といったことにとらえられ易いので、表現を考えたい。公開承認施設についてもおっしゃる通りと思うが、今現在、小田原市には公開承認施設がないため、特色として全面に出したかったのが具体的に書いてしまったところである。

【鳥居委員】 むしろ、どのような資料でも安全に見やすく展示する、ということであると思う。

【矢島委員長】 施設については章立てしてあるので、具体的な展示環境などのことはこちらに入れればよいのではないか。方向性については基本的な内容を示すところであるので、「歴史・考古・民俗を主体とした歴史総合博物館」のところは「県西地域の歴史・文化を分かりやすく展示します」を具体化したものをいくつか立項してもらえばよいのではないか。

【友部生涯学習課長】 いくつかの要素が関係しているところもあるので、文言は再度整理をしたい。

【矢島委員長】 現在保存している資料、あるいは潜在的のものも含めて、文化財、文化資源の価値を高めるような仕事をするということではないかと思う。他にはいかがか。次回はどうのような内容になるか。

【友部生涯学習課長】 2月を今のところ予定しているが、文案の前段である背景、目指す姿、方向性、活動等の確認を考えている。

【矢島委員長】 事務局にはこれまでの議論を踏まえて、文章化をお願いしたい。その他にはいかがか。

【井上委員】 ひとつよろしいか。これは要望になるのだが、実際に動き始めるのがかなり遅くなるかと思うのだが、博物館ができた段階で機能するのはかなり難しいので、ハード面と同時に、職員がコーディネーターとしてどのようなことをしていくのか、現実的には学芸員が力量をもつということと、学芸員をその間に育てていくということが必要であると思う。以前は小田原市には学芸員が少なかったが、おそらくこれを見通して採用していくのだと思うが、整備が先になってもその間に人を育てていくことをかなり意識をしていかないと、実際に施設ができて重要なのは人だと思うので、そこをぜひお願いしたい。具体的には学芸員を既存の施設の中で育てていくことになると思うが、ひとつづくりをどのように考えておられるのか伺いたい。

【諸星文化部長】 文化部が平成23年度にできてから、学芸員は9名の増員を行った。確かに埋蔵文化財の人員が必要だという事情もあるが。その一方でこれまで小

田原にはジャンルとしていなかった美術や文学、民俗についても採用を行った。最近十分にできてはいないが、学芸員向けの研修も行っている。また、学芸員のチームがありそこで勉強会を行っている。天守閣のリニューアルに際しては、天守閣にも学芸員は2名いるが、その2人だけでは到底対応できるものではないので、これは学芸員が総出で対応している。これは作業として行っている部分もあるが、それぞれが勉強し直しながら取り組んでもらっているところもあるので、これ自体にも研修的な効果があると思っている。清閑亭で月一回学芸員が皆様の前で話をしており、この準備をするのは個人では相当のエネルギーを要するのだが、そういったところで求められて出ていくことが多いので、その中で自分自身の専門分野も含めて、様々な形で勉強をしてもらっている。組織的に当初想定していたような研修をやり切れていないところもあるが、そういった日々の勉強というところでは、今申し上げたようなことが行われている。私どもの仕事としては、組織のありよう、職場のローテーション的なものを含め、長期的な視点で人材育成は行っていかなければならないと認識している。

【相澤副委員長】

よろしいか。少し前に言えばよかったが、文化財を守る、文化財の価値を高めるということを考えると、その前提として文化財教育が必要になる。文化財教育とはどのようなものかということ、また難しいのだが。これをどこでやるかと言えば、博物館でやらなければならないと思う。やはり小学生や中学生くらいのときに文化財の大切さを教えていかないと、定着していかないと感じている。大きな構想の中では少しレベルが違うかもしれないが、これから構想をつくっていくときに、文化財を守っていく文化財教育を博物館でやっていく、文化財を守るためにどういった取り組みが必要かということを知ってもらうこと、展示などを考えていただきたい。また、今それをやるのは博物館しかないということも認識していただきたい。例えば、基本的な考え方一番上の2行目などに「小田原の宝を守り未来に伝える」と入れるなど、そういった視点を新しい博物館に入れていただければよいのではないか。

【矢島委員長】

他にはいかがか。

【鳥居委員】

今日の会議での博物館の建設が少し延びるということも含めて、先ほどの井上委員との質問にも関係するのだが、今、小田原市役所にいる学芸員の方が全員ではないにしろ、新しい博物館ができればそこに勤務することになると思うのだが、その間の教育は非常に重要であると思う。小田原市の場合は学芸員として採用しても、厳密に言えば学芸員とは任用資格であるので、博物館や博物館相当施設で勤務しないことには、学芸員というのはおかしいのだが、名前の問題だけではなく、学芸員としての経験を積むこ

とができるような教育が必要である。天守閣の展示プランに参加していただくのは大いに結構だと思うのだが、ストーリーを文章でつくるという机の上でできる仕事以外にも、調査、展示、資料の保存なども体験できるようにして、新しい館ですぐ働けるような体制を考えていくのは必要だと思う。

【矢島委員長】 東京都が先鞭をつけてしまったが、埋蔵文化財の発掘を行っていただければ学芸員というようなことにはならないように願いたい。  
他になれば本日の会議はここまでとする。